

## 奨励

### 私たちの光と闇

|       |                                            |
|-------|--------------------------------------------|
| 奨励    | 山田 真理〔やまだ・まり〕                              |
| 奨励者紹介 | 日本キリスト教団上鳥羽教会牧師<br>同志社大学キリスト教文化センター非常勤嘱託職員 |

愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しい掟ではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です。この古い掟とは、あなたがたが既に聞いたことのある言葉です。しかし、わたしは新しい掟として書いています。そのことは、イエスにとってもあなたがたにとっても真実です。闇が去って、既にまことの光が輝いているからです。「光の中にいる」と言いながら、兄弟を憎む者は、今もお闇の中にいます。兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。しかし、兄弟を憎む者は闇の中におり、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がこの人の目を見えなくしたからです。

（ヨハネの手紙一 二章七——一節）

### 荒れ野に花が咲く

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ 砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。  
野ばらの花を一面に咲かせよ。  
花を咲かせ 大いに喜んで、声をあげよ。  
砂漠はレバノンの栄光を与えられ カルメルとシャロンの輝きに飾られる。  
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

これは、聖書の民イスラエルがバビロン捕囚から解放されることを、預言者イザヤが預言したものです。イザヤ書三十五章——二節の言葉です。イスラエルの民は、バビロニアに征服されてバビロンに捕囚民として捕えられてしまいました。このイスラエルの民が捕囚から解放されるということです。その解放のとき、荒れ野に、砂漠に花が咲き乱れるのだと。まるで荒れ野に花が咲くかのようなことが起こるのですよ、捕囚という絶望的な状況のなか解放が訪れるのですよ、と告げられているのです。

この荒れ野は私たちの「心」と捉えることができます。私たちの心は、荒れ野、荒れ地、砂漠のようです。空しさ、無意味が広がっています。この心に花が咲くのです。野ばらが一面に咲くのです。しかし、空しさ、無意味が広がる心において、花が咲くことを信じることは何と困難なことでしょうか。空しさを打ち消すかのように、これがなければ生きていけない、この人がいなければ生きていけないと、すがりつくものを絶えず探し求めてしまう私たちです。すがりつき、依存するものをもっていることで、安心を得ようとしてしまいます。これがなければ、この人がいなければ生きていけないと、何かにがんじがらめになっている生き方は、ものや人から自由になれず、不自由さを抱えた生き方なのです。この人がいなければ生きていけないという思いは、一見、深い愛にもとれますが、これは愛ではありません。

相手がどんな優れた人であっても、私にはこの人がいなければ生きていけないと言っている間は、自分のために相手から何かを手に入れようとしているのであり、他者を愛していることにはならないのです。自分のために他者から何かを求めている愛は、他者から反応がないと、返ってくるものがないと、終わりを迎えます。結局は自分のために他者を求める「愛」は、私たちの荒れ野、砂漠のような何もない心をごまかす、寂しさを満たすための「道具」にすぎないわけです。

何もないことへの不安や恐れが襲いますが、何もない、無力感を覚え、無意味を感じる荒れ野という心を受け入れなければなりません。あらゆる依存、あらゆる欲望に一度死んで、何もない砂漠に立ってみなければなりません。荒れ野、砂漠に立とうとすると恐怖で押しつぶされそうになります。自分しか存在しない不安ははかりしれません。しかし、自分のために他者を求める「愛」から抜け出すためには、荒れ野で、一人にならなければならないのです。

### 心が動くとは

十月二十八日、京都市議会で、「缶・びん・ペットボトル」及び「大型ごみ」の持ち去りを禁止する条例改正案が議決されてしまいました。京都市の野宿生活者のほとんどがアルミ缶回収をし、自分たちができる最後の労働をして、最低限の収入を得て、食事を得ています。アルミ缶回収は、野宿生活者にとって最後の生きる手段、生きる権利なのです。この条例改正案が出される前に、京都市が市民の意見を求めていましたので、私たちの教会も反対意見を書いて提出しましたが、結果は改正案賛成が七十八人、反対が六十八人でした。残念ながら十人の差があり、新聞では市民は賛成者が多いと伝えていました。

なぜ、この改正案が出されることとなったのでしょうか。それは、最近、業者がトラックで、家庭から出されたアルミ缶を持ち去るようになったことが大きな原因です。また、最近リストラされ住まいを失い、野宿生活をするようになった人びとのうち、燃えないゴミの日に出されたゴミの中からアルミ缶を回収する際、騒音を立ててしまう人がいたからです。

長く野宿生活をされている人びとは皆さん言うておられます。「アルミ缶は、その場で抜き取るのではなくて、一度河川敷に持ち帰ってから抜き取るようにしている。そして、残りは次の週の日に戻している」と。長くこの労働を続けて来た人びとは、細心の注意を払っておられるのです。野宿生活者当事者に取材をした新聞社は、こうした当事者の声を記事として載せていました。

アルミ缶回収を禁止するのなら、その前に、他の労働を斡旋しなければならないでしょう。あるいは、居宅を確保（住所の確保）し、就職できるよう福祉政策を考えるべきでしょう。何の政策もないまま、最後の労働を奪うことに対し、きょうと夜まわりの会、反貧困ネットワークや、反貧困ネットワーク京都など十六の団体が共同声明を出し、京都弁護士会も市に要望書を提出しました。

また、野宿生活者も参加し、きょうと夜まわりの会のメンバーと共に、街頭で、条例改正案反対署名活動を行い、京都市長や各党に署名を届けました。署名活動に参加した野宿生活者のＴさんは、署名活動の前に次のように語っておられました。「条例が提案されたのなら、必ず可決するだろう。そんなものだ。でも、反対の声をあげるために参加する」。

この声を聞いて思いました。野宿生活者当事者が街頭に立ち、自分の身をさらす。彼は大きな決断をしてくださったなあと思いました。自分のことだけでなく、仲間の生活のためにも決断してくださったのです。

私たち、こうした「心」の動きがなかなかとれません。先に触れましたように、自分のために他者を求め、自分が生きていくためにいてくれなくては困るという考えから出ることができません。仲間が生きていくために自分が行動しなければならないんだと言ったＴさんのようには、心が動かないのです。私にはこの人がいなければ生きていけないという思いを強くするばかりです。自分のために相手から何かを手に入れようとするばかりです。

ゴミを回収し、最後の生きる手段としている人間に対して、「ゴミさえ拾ってはいけない」と法で禁じる。私たちの社会には闇が広がっています。私たちの心には闇が広がっています。他者の存在が全く消えてしまっています。他者の存在が全く見えなくなってしまっています。自分がどうやって生き延びられるかしか考えようとしな。他者がどうなるかを考えようとしな。閉ざされ、光が差し込んでこない心です。空しさ、無意味が広がる荒れ野のような心を、私たち自身が維持してしまっているのです。

私たちに、必要なことは、他者を一人のかけがえのない尊い命として慈しみ、理解し、仕えていく、奉仕していくことです。

### 他者のための愛

今、こどもが親元から離れて就職するようになって、あるいは結婚生活をするようになって、実家から近いところで暮らしたり、親とすぐに話せる環境にしようとする傾向があると言われてます。精神的自立ができないのです。一人で生活するようになり、仕事をやるようになるということは、そこで出会った人びとと信頼関係を築いて共に生きていくということです。また、結婚生活をするということは、結婚相手と共に生きていくということです。しかし、何か困ったことに遭遇したときは、今出会っている友人や結婚相手よりも、親に相談して解決したいと望んでいる人が多いようです。

お母さんがいなくなったら生きていけない、お父さんがいなくなったら生きていけないと考えている子どもたちが大勢いるのです。逆も存在します。子どもに頼られなくなったらどうしようとする親もいます。また、夫婦の関係、恋人の関係もそうです。相手がいなくなったなら生きていけないという思いから、やがては抜け出さなければなりません。自分のために相手を求める愛から出て、相手を一人のかけがえのない尊い命として慈しみ、理解し、仕えていく、奉仕していく、自分をささげていく。これが聖書が語る愛です。神は自分のために人間を愛するのではなく、人間のために人間を愛し、理解し、自分をささげることを惜しまれません。

ヨハネの手紙一 二章七節以下が今日の聖書箇所です。七節「愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しい掟ではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です」。あなたがたが初めから受けていた「古い掟」とありますが、これは、イエスによって教えられた愛の戒めのことで、何も今初めて与えられた新しい掟ではありません。イエスは、旧約聖書のレビ記一九章一八節「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」に基づき、弟子たちに愛の戒め、愛の掟を与えていました。

イエスによって模範を示された愛の戒め。今初めて与えられた掟ではなく、既にイエスによって与えられていた、イエスによって模範を示されていた古い掟。しかし、ヨハネの手紙一の著者は八節で「しかし、わたしは新しい掟として書いています。」と敢えて述べているわけです。既に与えられている古い掟でありつつ、新しい掟でもある。なぜなら、今なお兄弟を憎んだり兄弟を裁いたり、自分には罪がないと主張する者たちがいたからです。こうした現状において、既に与えられている古い掟であっても、愛の戒めを、新しい掟として受け、実践しなければならなかったのです。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」。

自分を愛するとは、自己愛のことでありません。神が愛してくださっている自分を受け入れることです。自分は神に愛されていることを受け入れることです。神の愛によって自分を受け入れた者は、神の愛によって隣人を愛し受け入れていきます。私たちの命を創造された神は、私たちをかけがえのない尊い命として慈しみ、理解し、惜しみなく自分をささげる神です。この神の愛によって自分を受け入れ、他者を愛し受け入れていく。

他者への依存と願望が強いことが愛ではないことに共に気づかされたいと思います。自分のために他者を求める「愛」から抜け出さなければなりません。自分の存在を守りすぎて、他者の存在が消され、他者の存在が全く見えなくなってしまう闇の心、他者を愛せない心が、私たちの内に拡がっていないでしょうか。

一〇節「兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません」。あらゆる依存、あらゆる欲望に一度死んで、何もない荒れ野に立ってみる。不安や恐れに押しつぶされそうになるかもしれませんが、荒れ野にこそ花が咲くのです。何もない、空しい、無力な、荒れ野の心をごまかしている間は、他者への愛は生まれません。空しい、無力な心を受け入れた時に、他者への愛は始まるのです。他者を締め出していた闇の心に、光が拡がり、他者が存在し始めるのです。

そして、他者が存在し始めた心には、つまずきがないことを、共に聞く者でありましょう。

二〇一〇年十一月十日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録